

# 全国の火山活動状況（1979年4月～6月）

## 気象庁地震課火山室

気象庁が常時火山観測を実施している精密観測4火山については、昭和54年4月以降6月末までの活動状況を、普通観測13火山とその他の火山については報告をうけたものについて、状況を要約した。火山情報発表状況を第1表に、全国火山活動概況を第2表に示す。

第1表 火山情報発表状況（昭和54年4月～6月）

回数	桜島	阿蘇山	浅間山	伊豆大島	雌阿寒岳	十勝岳	樽前山	有珠山	北海道駒ヶ岳	吾妻山	安達太良山	磐梯山	那須岳	草津白根山	雲仙岳	霧島山
定期	3	3	3	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
臨時		4					1									

第2表 全国火山活動概況（昭和54年4月～6月）

### 桜島

爆発回数、噴煙回数、地震回数の月ごとの推移は第3表のとおり。地震活動は引き続き活発で、溶岩を火口に押し上げるときに付随して発生するB型地震の群発がしばしばみられたが、火口からの噴出力は全般に弱く、表面活動は比較的弱かった。

爆発は4月30日のあとは3か月にわたり発生せず（7月末現在）、継続的な無爆発日数としては1972年秋の活動活発化以来では、同年12月14日から翌年4月10日までの118日間に次ぐ記録で、6年ぶりのことであった。また少量の有色噴煙は比較的良好に出ているが、基準量（中量）以上に達しないため回数に寄与しないという事情もあるとはいえ、4月の噴煙回数は3回しかなく、1972年秋以降では月間値として最低であった。南岳火口上の火映は4月には一時的に認められる程度であったが、5月の後半は毎晩のように、また6月は8～9日、19～20日、25～26日のそれぞれ深夜から未明にかけて、气象台から認められた。島内では桜島の鳴動がよく聞かれた。

火山	4月	5月	6月
桜島	▲	△	△
阿蘇山			▲
樽前山	△	△	△
有珠山	△	△	△
霧島山	△		
福徳岡の場	△		
福神海山	△		

第3表 桜島火山観測資料

月	1979/4	5	6
爆発回数	7	0	0
噴煙回数	3	9	10
地震回数	6852	9204	8120

5月26日と31日には無感だが比較的大きなA型地震が発生した。6月26日10時25分にもA型地震の発生があり、京大桜島火山観測所により震源は桜島北東海域（燃島北北東にある硫黄島付近）の深さ10kmと決定されたが、従来の地震ネットではB型地震の一つとして見過ごされるかもしれない小さな地震であった。火山性地震の群発傾向は4月も活発で、月間延べ15回発生した。5月は上旬後半と下旬前半に集中発生した。6月は5月よりもさらにふえ、群発時の最大振幅も5月より大きいものがふえた。

5月28日、京都大学桜島火山観測所により撮影された南岳火口写真によると、南岳A火口底には直径150m、高さ数m程度の火口丘が形成され、中央はへこんでいたが、この中の溶岩量は約15万 $m^3$ と推定された。B火口はA火口をしのぐほど成長している様子がうかがわれるが、噴気のため詳細は不明であった。南岳火口底の火口丘は1975年10月28日にも確認された。

## 阿蘇山

中岳第1火口は引き続き全面湯だまりが、6月13日噴火直前まで続いた。この中で4月13日、5月23日にはそれぞれ火孔底の北東側又は東側の一部で、土砂噴出が観測された。火口縁上では少量の白煙が時々観測される程度で、表面的には静かな活動となっていた。

6月1日11時の現地観測によれば、火口底から高さ30m前後の土砂噴出が始まっており、規模の大きいものは噴石を混じえ、5～10分の間隔で噴出していた。15時03分には火口縁に達する顕著な噴出があり、北西側火口縁の行幸記念碑付近で50×30mの範囲に、人頭大を含むこぶし大の噴石が落下した。これに伴う火山性微動の最大振幅は2.7 $\mu$ であった。2日11時の現地観測によると、第1火口はほとんど連続的に土砂噴出を繰り返しており、鳴動を伴い、白煙を火口縁上200～300mの高さまで噴き上げていた。9日09時04分には火口付近、深さ1～2kmを震源とする火山性地震が発生し、山上測候所で震度Ⅱを観測した。火山性連続微動は1日早朝から次第に増大し、12日8時には最大振幅12 $\mu$ に達した。12日14時50分の現地観測によると、連続的に強い噴出活動が繰り返され、噴石は高いもので火口縁上に達し、大きなものは人身大程度のももあり、ほとんど火口内に落下した。鳴動も強く地鳴を伴い、本格的な開口活動が続いた。噴煙は白色、中量で噴出力は強いが、火山灰の噴出は認められなかった。連続微動は引き続き大きく、12日13時01分には最大振幅22 $\mu$ を記録した。12日19時40分から降灰、大きかった連続微動は18時22分ごろから急に小さくなり、13日03時36分ごろから一段と小さくなり、噴火直前までは孤立型微動が時々現れる程度で、微動停止現象を思わせる記録となった。13日11時ごろの現地観測では湯だまりは全くなり、黒灰色をした火孔底が露出していた。

13日15時10分の噴火はこのような状態で発生したが、爆発的なものではなく、白煙の量が次第に増加し、黒灰色の火山灰や火山砂が増え始め黒色噴煙となり、数分のうちには大小の噴石が飛散する状態となり、噴煙の高度も1500mをこえた。噴石は火口縁上400mの高さに噴き上げ、火口周辺一帯に落下し、火山雷も数回観測された。噴石は最大、人頭大～半身大のものが、第1火口縁の南西～西側に1 $m^2$ 当り数個の割合で分布、降灰の厚さ5cm、火口北側約1kmくらいの所では降灰の厚さ10cmくらいが観測された。火山灰は火口の北～北東方向へ流れ、阿蘇町、一の宮町には集中的な降灰があり、このため一の宮町の有料道路と阿蘇登山有料道路坊中線はそれぞれ一時的に通行が止められたほどである。火山性微動は噴火とともに大きくなり、最大振幅3 $\mu$ 程度となった。

14日も噴石活動は衰えず火口縁上200mくらいまで噴き上げ、ほとんど火口内に落下、灰色やや多量の噴煙が高さ1500~2000mに達した。火山性連続微動はほとんど変化なく、平均0.5 $\mu$ 程度であった。

15日23時40分ごろから強烈な鳴動が始まり、山麓の阿蘇町や一の宮町まで聞かれ、戸障子がビリビリ振動した。このような鳴動は昭和8年以來のことであった。火口状況は暗夜のため詳細不明だが、赤熱噴石が火口縁上200mの高さに達し、火映も時々観測された。火山性連続微動は平均0.6 $\mu$ 程度に増大した。

16日07時ごろから鳴動は弱まったが、11時ごろからまた強まった。灰色噴煙と白煙を交互に噴出、赤熱したスコリヤ状の噴石が火口内に落下した。

17日13時30分の現地観測によれば、噴石活動はなく鳴動はやや弱まった。しかし、阿蘇山測候所基地事務所(阿蘇町)には、かなり降灰があった。

26日まで多少の消長はあったが、ほとんどこのような活動で火口内では噴石活動が繰り返された。

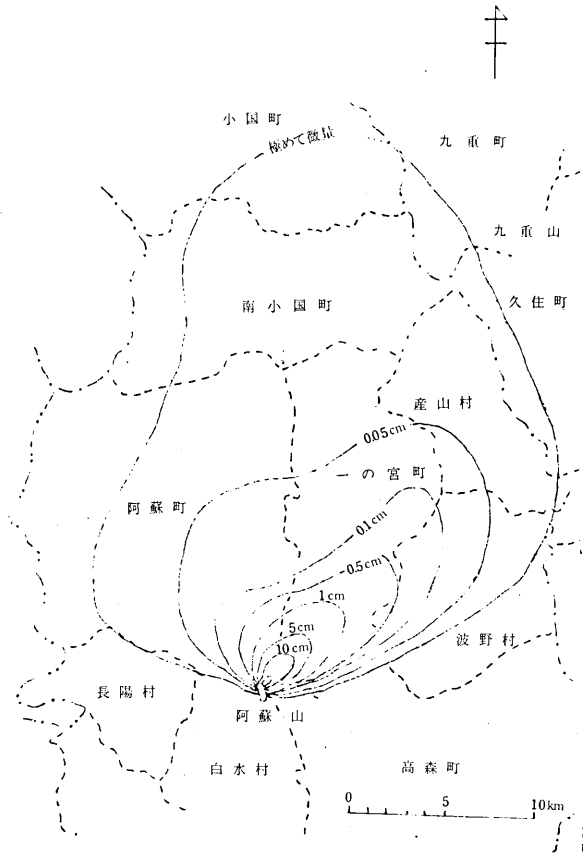
26日夕刻から梅雨前線の活動により大雨となり、30日夕刻までの総雨量は720ミリとなり火口は一時的に閉塞したが、30日8時ごろから噴出ショックによると思われる特殊な短周期微動が現れはじめ、17時ごろから特に増大した。この時期に火口が再度開口した模様で、7月に入って1日から2日にかけて、噴石や火山灰の噴出が活発となった。

噴火後6月末までは降灰は主として火口の北東方にあり、火口の南側には全くなかった。23、24日の両日、第1火口縁東側からの現地観測で、火口縁上に厚さ25cmの降灰の堆積が観測された。

阿蘇山測候所によれば、噴火から6月末までの降灰分布は第1図のとおりで、噴出物総量は約140万トンと推定された。熊本県阿蘇事務所の調べでは、被害金額は7月4日現在、約1億7000万円と概算された。

阿蘇山測候所は6月13日の噴火により生成された火孔を、6月25日、791火孔と命名した。

震動観測の結果は第4表のとおりで、孤立型微動回数が4月以降急増したことが特徴となっており、また6月は噴火の前後からは連続微動の増大により、孤立型微動回数は観測できなくなった。



第1図 降灰分布  
(1979年6月13日噴火後6月末まで)

第4表 阿蘇山火山観測資料

月	1979/4	5	6
地震回数	21	15	26
孤立型微動回数 (0.5 $\mu$ 以上)	1912	1521	>1535
連続微動平均振幅( $\mu$ )	0.2	0.2	1.3

### 浅間山

遠望観測によれば白煙、中量以下(5月上旬やや多量の日もあった)で、噴煙の高さは500m以下であった。地震回数も比較的少なく(第5表)、一般に穏やかに経過した。

第5表 浅間山地震回数

観測点 \ 月	1979/4	5	6
A	2	21	54
B	343	483	261
C	178	335	199

### 伊豆大島

5月5日、6日、30日にそれぞれ1回ずつ、また6月7日と16日には一時的に小さな火山性微動が記録された。5月11日と26日には火山性地震が多数記録されたが、いずれも小さなものであり、6月11日11時27分には大島で震度Ⅲの地震を記録した。そのほかは特に変りはなく穏やかに経過した。

### 雌阿寒岳(釧路地方気象台 6月15日火山情報)

6月13、14日に雌阿寒岳の現地観測を実施したが、火山活動は前年9月の現地観測以降大きな変化はなかった。火山性地震や遠望観測による噴煙の状況も特に異常はなく、火山活動も平穏に経過していると考えられる。

### 十勝岳(旭川地方気象台 7月6日火山情報)

7月5、6日、十勝岳の現地観測を実施したが、前年9月の現地観測に比べ大きな変化は認められなかった。遠望観測による噴煙による噴煙の状況も特に異常はなく、火山性地震回数も平常の状態であった。

### 樽前山(苫小牧測候所 4月27日、5月23日火山情報)

樽前山頂付近に降灰があったのは、4月中旬のあとは5月中旬に1回あっただけで、表面活動は穏やかとなった。

5月11日10時30分~11時10分、火山性微動が記録され、遠望観測の結果、黒褐色の煙が400mの高さに達し、南側に流れ山頂付近に微量の降灰があったとみられる。火山性地震回数は月ごとの推移は、4月70回、5月66回、6月142回、7月58回、同じく火山性微動回数は4月45回、5月9回で、6月、7月は記録されなかった。

5月22日実施した樽前山の現地観測によると、A火口の南側10m以内には、前年末以降の活動により噴出された灰が、約1.5m堆積されており、また噴気もやや強まっていた。

### 有珠山（室蘭地方気象台 5月17日火山情報）

噴火は1978年10月27日のあとは引き続き発生せず、噴煙活動も特に異常は認められず、表面活動は平穏に経過している。

5月14日実施した有珠山の現地観測によると、火口原内の噴気温度は、I火口495℃、小有珠の西側の外輪山内壁の噴気地帯で98℃、北屏風山南麓斜面の噴気地帯で95℃であった。

有珠山A点による地震回数、有感回数の月別推移は第6表のとおりで、緩慢ながら減退傾向にあることがうかがわれる。

第6表 有珠山地震回数（A点）

1979/月		1	2	3	4	5	6
地震	月合計	2357	1826	1967	1832	1593	1622
回数	日平均	76	65	64	61	51	54
有感	月合計	402	329	372	306	232	262
回数	日平均	13	12	12	10	7	9

### 北海道駒ヶ岳（森測候所 6月1日火山情報）

5月31日、駒ヶ岳の現地観測を実施したが、特に目立った変化はなく、火山活動は静穏な状態が続いている。

遠望観測によればときに少量の噴煙がみられる程度で、地震回数も月数回程度のレベルで経過している。

### 吾妻山・安達太良山（福島地方気象台 6月21日火山情報）

吾妻山（一切経山）の火山活動は次第に弱まっており、安達太良山は特に異常と思われる現象もなく平穏な状態が続いている。

火山性地震は2火山とも変化はなかった。

6月上旬から中旬にかけて実施した現地観測結果によると、一切経山の南東斜面（八幡焼）は前年10月と比べ、噴気・地熱などの表面現象は弱まり、昭和51年ごろの平穏な状態に復しつつある。また安達太良山は特別な変化は認められなかった。

吾妻山は白色噴煙が高さ、量とも徐々に減少し、4月ごろからきわめて少量となり、見通しのよい日でも確認できないこともあるくらいであった。

### 磐梯山（若松測候所 6月21日火山情報）

6月12、13日に磐梯山の現地観測を実施したが、前年10月に比べ噴気、地熱、湧水などについて特に異常は認められなかった。また火山性地震回数も大きな変動はなかった。

### 那須岳（宇都宮地方気象台 6月1日火山情報）

5月21、22日、那須岳の現地観測を実施したが、特に目立つ変化は認められなかった。

遠望観測で白色若しくは灰白色少量の噴煙が続き、また火山性地震回数もここ数年間の平均回数に近く、

平常の状態となっている。

#### 草津白根山(前橋地方気象台 6月23日火山情報)

6月12、13日に草津白根山の現地観測を実施したが、前年9月に比べ特に大きな変化は認められなかった。火山性地震回数も毎月10回前後で推移し、特に変化はなかった。

#### 雲仙岳(雲仙岳測候所 4月10日火山情報)

4月7日、雲仙岳の現地観測を実施したが、温泉温度、地中温度等には特に大きな変化はなく、清七地獄内北東部の1×5mの地域で、乳白色の泥土を時々高さ2mくらい噴き上げていた。火山性地震回数の月別推移は、前年12月355(9)回、1月105(3)回、2月71(0)回、3月55(1)回であった(カッコ内は有感回数)。

雲仙岳測候所では6月27日05時49分に震度Iの地震を観測したが、この地震は九大島原火山観測所でも震度Ⅲであり、同所ではこのほかにも数回の地鳴を伴った有感地震を観測した。九大観測所は島原市眉山山麓にあり、震源は同所の近くとみられる。

#### 霧島山(鹿児島地方気象台 5月10日火山情報)

火山性地震回数はそう多くはないが、4月に実施した現地観測の際に新燃岳火口内の第6火孔でごく小さな土砂噴出が発生していた痕跡が認められた。

新燃岳南西斜面に設置した倍率5000倍の地震計による月別地震回数は1月40回、2月25回、3月62回、4月43回で、3月の増加は17日に発生した鹿児島県北部の地震(マグニチュード4.9)とその余震によるものであった。

4月23～24日、山麓と新燃岳、御鉢火口の現地観測を実施した。その結果、山麓の地熱や温泉温度及び御鉢火口内の噴気状態、温度等に変化はなかったが、新燃岳の火口内にある第6火孔で小規模の土砂噴出の痕跡が認められた。同火孔には1978年7月11日始めて接近して撮影を行い、12月12日には火口縁上から観察し変化はなかったが、4月23日の観測では大きさ5×10mの火孔の縁に一部石筍のような形で2mぐらいの高さで堆積していた硫化物などが、10×10mに飛散し、コールタールのような黒い噴出物が流れ出ている。この第6火孔の噴気温度は火口縁上で173℃であった。

新燃岳外壁の第2火孔内にも活発な噴気孔があり、昇華した新鮮な硫黄で縁どられているが、外縁は1.5×1.2m、噴気温度は132℃であった。

#### 諏訪之瀬島(諏訪之瀬島分校 報告)

1979年4月～6月 噴火なし

#### 海底火山(海上保安庁水路部 報告)

海上自衛隊機の観測によると、4月26日、福徳岡の場と福神海山で変色水が認められた。